表紙作品解説

萬山畳翠図　一幅　跡見花蹊筆

明治3年（1870）　170.0×57.0cm

絹本淡彩　跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵

萬山畳翠図は、画賛によれば董北苑の図に倣って制作したもので、丁寧な筆致で描いた完成度の高い作品である。『花蹊日記』には、明治3年3月9日に取り掛かり、同年4月6日に完成したと記されていることから、制作年の分かる初期の作品として重要である。この頃、跡見花蹊は上京をひかえ、京都の塾で門下生に教授しながら、書画の研究や制作に打ち込んでいた。

遠山には霞が立ち込め、森閑としていて、仙人が住むという不老不死の霊地、蓬莱山を髣髴とさせる。山塊は奇観を呈し、複雑な地形を形作っている。作品のほぼ中央、縦に並ぶように配された三つの建物は、画面に一層の奥行きを与えている。一方、人物は水辺に歩を進め、開け放った窓の外から水面を眺めている。中景では、滝の流れる絶景を楽しむ姿がある。自然の威容と比して、人物たちは穏やかである。

十代の頃から南画を師事していた日根対山（1813—1869）にも同題の作品があり、子弟の交流を伝えている。跡見花蹊は師の構図や表現方法を踏襲しつつ、豊かな想像力で、印象深い山水を創りだしている。

写真提供：跡見学園女子大学花蹊記念資料館

文　：学芸員　渡辺　泉